

はじめに

溪流魚を増やすために全国的に行われているのは「放流」ですが、それが常に優れた増殖方法ではないことが、これまでの研究で明らかとなっています（図1）。

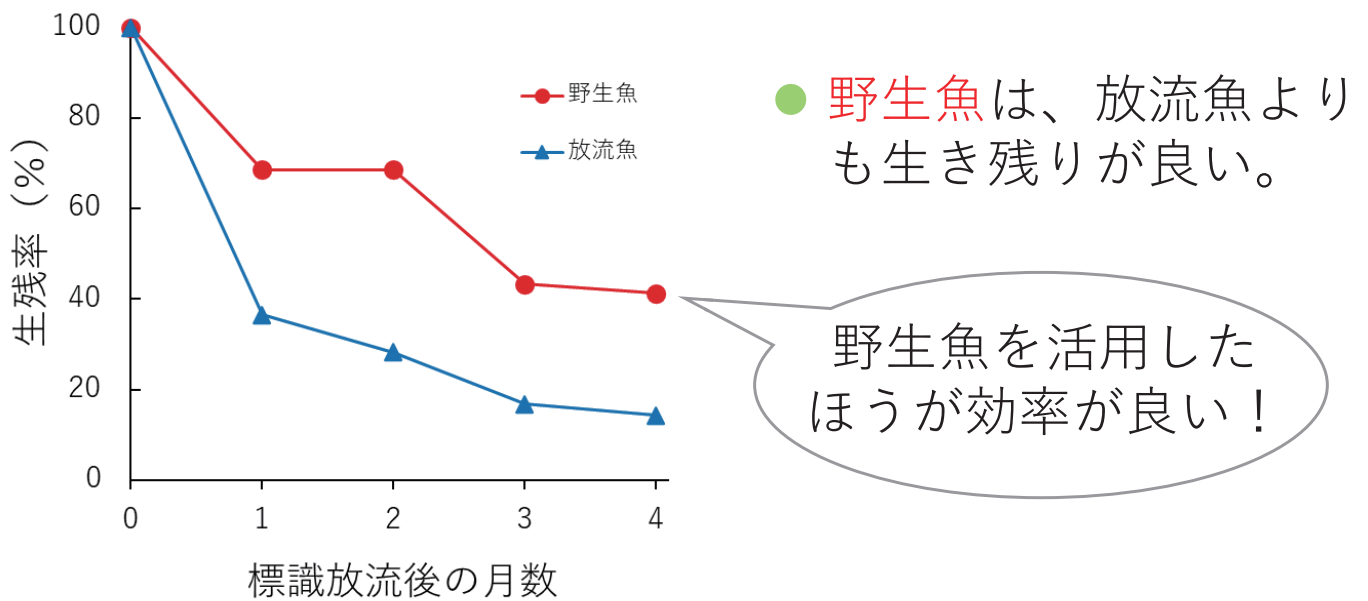
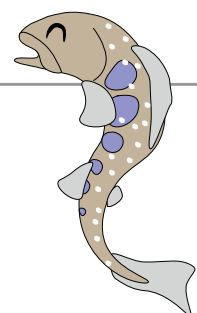


図1 滋賀県犬上川での野生魚と放流魚の生き残り

- 天然や野生※1の溪流魚を持続的に利用するためには「放流」だけでなく「漁場管理」も必要です。

※1 天然とは、養殖魚や野生魚と交雑しておらず、遺伝子がそれぞれの川固有の魚のこと、野生とは養殖魚と交雑したことがあり、遺伝子はそれぞれの川固有ではないが、自然繁殖している魚のことを意味します。

本パンフレットでは、これまでに得られた漁場管理の効果と活用（P 3-13）・運用方法（P 14, 15）について説明します。



①禁漁区設置、②釣獲日誌、③監視活動
この3つを取り入れて、自然繁殖の力を上手に
利用した漁場管理を目指しましょう！



図2 本パンフレットで提案する漁場管理の仕組みとその役割

それぞれの役割を順に見ていきましょう。

①禁漁区※²を設置して、漁場へ天然・野生魚を添加する (P 4-8参照)。

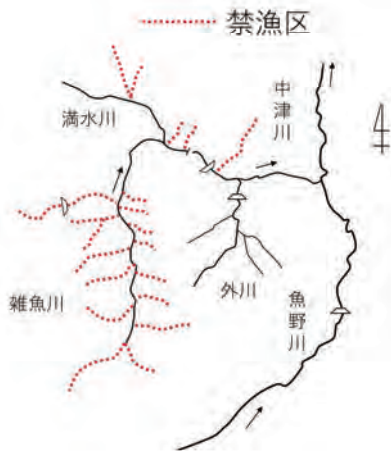
②釣獲日誌を作成して、漁場を把握する (P 9参照)。

③監視活動や看板設置で規則の遵守を図る (P 10、11、12参照)。

※2 本パンフレットでは資源添加の役割として禁漁区を挙げていますが、渓流魚の繁殖環境が整っており、管理が行き届いている漁場であれば、禁漁の代替としてキャッチアンドリリース等の漁獲規制と監視活動および釣獲日誌の作成の組み合わせでも、同様の管理は可能と考えます。

①禁漁区を設置して、漁場へ天然・野生魚を添加する

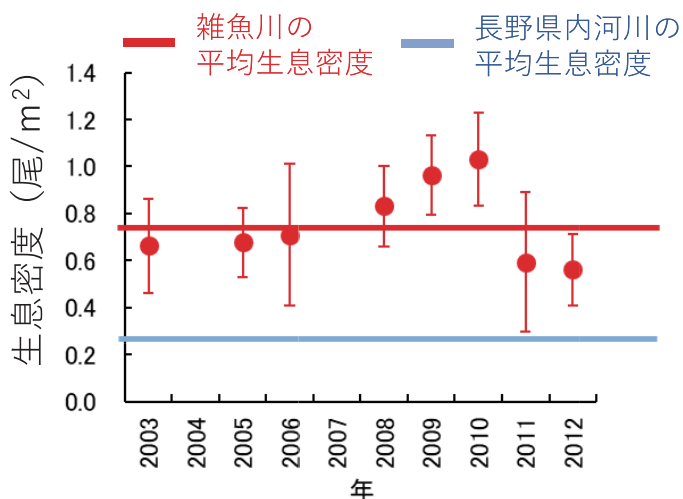
支流を禁漁にすると本流で魚がよく釣れる



- 長野県の志賀高原漁協※3が管理する雑魚（ざこ）川では、ほとんどの支流を禁漁にしています（図3）。

※3 本パンフレットでは漁業協同組合を漁協と略します。

図3 雑魚川の禁漁区域



- 釣り場となる本流では、イワナの生息密度が他河川よりも約3倍も高く（図4）、稚魚の数も多いことがわかっています。

※4 長野県水産試験場研究報告第14号の図を改変。

図4 雑魚川のイワナ生息密度※4



- この釣り場は、天然のイワナが1時間で平均4.2尾釣れるため、釣り人の満足度の高い漁場となっています。

なぜ魚がよく釣れるのでしょうか？